
少年アリス

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年アリス

【Nコード】

N4745F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

不思議の国のアリスをモチーフとした小説です。ほぼ全員が性転換しています。最初は、文章だらけで会話が少なくなると思いますが、後にオリジナルで進んでいきます。読みにくいかもしれませんが宜しければ、不思議の世界へ・・・。

1 兎の穴に落ちる（前書き）

文章だらけで、しかもお姉さんが、良いキャラしてます

1 兎の穴に落ちる

アリスは、土手の上で、お姉さんのそばに座ってるのが、とても退屈になってきました。おまけに、何もすることが無いのです。一、二度、お姉さんの読んでいる本をのぞいてみたけれど、その本には、絵もなければ会話ありません。

「変なの」

とアリスは考えました。

「絵もなければお話もない本なんて、なんの役にもたちやしないよ」

3

それよりも、アリスの今の姿を聞きました。

「お姉さん、どうして僕は・・・女の子の洋服を着てるの？」

「それは、可愛い・・・じゃなくて・・・萌え・・・じゃなくて・・・まあ仕方無いのよ」

変な単語が聞こえました。しかも、話を逸らしました。ですが、

アリスには何か分りません。

アリスの容姿は、金髪で肩までの長さでサラサラで指通りがよさそうです。顔も女の子寄りで可愛いんです。だけど、男の子なんです。

暇なアリスは、心の中で出来るだけ考えようと思いました。　と　いうのは、その日はとても暑かったので、眠くて頭がぼんやりがちだったのです。　シロツメクサで花飾りをつくりお姉さんを脅かそうと思ったが、わざわざ立ち上がって立ち上がってシロツメクサを摘むだけの価値はあるだろうか？　と、そのとき、とんでも無いものがアリスの前に現れました。

「え・・・ウサギの耳をした女の子？」

赤い目にウサギの耳を着けてる（カチューシャとかじゃないから生えてるんだと思う）チョッキを着た美少女でした。

白髪で二つ結いの三つ編みが腰まで伸びてます。それだけなら、女の子に見えるがスポンを履いています。

それは、とくに驚くことではありませんでした。それにアリスは、その兎が。

「あう、あう、遅くなっちゃうよ！」

と独り言を言ったのも、それほど不思議とは思いませんでした。（もっとも、あとでそのことを考えた時は、おかしいと思わなければならなかったのだ、と思いました。その時は、ごく普通のことのように感じたのです）けれども、その兎が、目の前でチョッキの

ポケットから時計を取り出し、時間を確かめて、また先を急ぐのを見たときには、さすがのアリスも思わず立ち上がっていました。なぜといって、チョッキを着ていたり、そのポケットから時計を取り出したりする兎は、まだ見た事が無いのに気が付いたからです。たちまち燃えるような好奇心にかられたアリスは、あの格好のまま野原の中を、兎を追いかけて走り出し、ようやくのことで、兎が、垣根の下、大きな兎穴に飛び込む所を見るのに間に合いました。

次の瞬間、アリスもその穴に飛び込んでいました。どうやってそこから出るのかなどいうことは、これっぽっちも考えませんでした。兎穴はしばらくの間、トンネルのようにまっすぐ続いていて、突然ガクンと下り深い井戸のようなところへ、グングンと落ち込んでいました。

井戸が本当にとても深かったのか、それとも落ち方がひどくゆっくりしていたのか、落ちていく途中で、周りを見回したり、これからどうなるのかと考えたりする時間は十分にありました。まず、下を見下ろして、どこへ行くのか確かめようとしたが、暗くて何も見えません。次に井戸の回りの壁を見ると、そこは戸棚や本棚がいっぱいでした。所々に、地図や絵が釘にかかっていた。それには『オレンジ・マーメイド』というラベルが貼ってあったのです。けれども、それは空っぽで、アリスはがっかりしました。それでも、壺を下にいる誰かに当たって死んだりするといけないし、と思ったので、落ちながら、戸棚の一つの上によりやくのことで載せました。

「さあて、これだけ落ちたんだから、今度は階段から転がり落ちたって平気だね。家に帰ったら、みんな僕が、すごく勇気があるってびっくりするだろうね！そうだ！家の屋根から落ちたって、一言も痛いなんて言わないに決まってる！」

（これは、確かにその通りでしょう、屋根から落ちたのでは、口もきけません）

下へ 下へ 下へ。いったいどこまで落ちたら止まるのか。

「もう、何キロぐらい落ちてきたかな？」

と、アリスは口に出して言いました。

「もう地球の真ん中辺りまで来たに違いない。ええと、そうすると、
六 キロ以上も来たことになるね」

（アリスは学校の授業のとき、こういったことをたくさん勉強してきました。だから、その知識をひけらかすには、聞いている人が誰もいないのだから、あまりよい機会とは言えなかったけれども習ったことを何度も声に出して言うてみることは、いい復習になると思っただのです）

「そうだ、たしかそのくらいの距離だよ。でも、緯度と経度とは、どのくらいなのかな？」

（実はアリスには、緯度も、何のことかさっぱり分らなかったのですが、いかにも立派そうな言葉なので、使ってみたのです）
やがて、アリスはまた喋り始めました。

「このまま落ちていくと、地球を突き抜けてしまっ^アんじゃ！頭を下にして歩いてる人達の所へ飛び出したら、おかしいんだろ^アうな！対^ア情^ア地人^アというんだな」

（この時にはアリスは、誰も周りに聞いてる人がいなくて良かった、と思いました。どうも、正しい言葉のような気がしなかったからです。注　その通り。本当は、a n t i p o d e s　対蹠地　アンチポーズ、またはそこに住む人間が正しいのです）

「でもその国の名前ぐらいは聞かなければいけないね。ここは二ユージーランドでしょうか、それともオーストラリアでしょうか、すみませんが教えてくださいませんか？」

アリスは喋りながらお辞儀をしようとしました　でも、考えてみてください、空中を落ちながらお辞儀をする格好を！　あなたは出来ると思いますか？

「きっとそんなことを聞くなんて無知な男の子だと思われるに違いない。そう、そんなこと聞いちゃ絶対ダメだ。たぶん、どこかに書いてあるから、それを見れば良いんだ」

下へ　下へ　下へ。他に何もすることが無いので、アリスはまたすぐに喋り出しました。

「ダイナが今夜、とても寂しがるね　僕がいらないから！」

ダイナというのは飼う猫です。

「お茶の時間に、ミルクをやるのを家の人が忘れなければ良いけど。ああ、ダイナ！お前も、僕と一緒に来れば良かったのに！空中には鼠はいないだろうけど、コウモリなら捕まえられるかもしれないよ。コウモリは鼠によく似てるでしょ。でも、猫はコウモリを食べるかな？」

このあたりで、アリスはとても眠くなってきました。それでも、夢の中で言うみたいに言い続けました。

「猫はコウモリを食べるかな？猫はコウモリを食べるかな？」

時には間違つて。

「コウモリは猫を食べるかな？」

と言いました。というのはアリスには、どちらの疑問にも答えられなかったから、どっちにだって同じ事だったのです。そのうち自分がだんだん眠り込んでいくのを、アリスは感じました。そして、

ちょうど、夢の中で、ダイナと手を繋ぎ、歩きながら。

「ねえダイナ、本当のことを言って。お前はコウモリを食べた事があるの？」

と、こう熱心に聞き始めた途端でした。いきなり、ドシン、ズシンとばかり、小枝と枯れ葉の山の上に落ちたのです。これで墜落は終わりでした。

2 内気な白兔

アリスはかすり傷ひとつ負わず、すぐに立ち上がりました。上を見上げましたが、頭上は真っ暗でした。前を見ると、また長い通路があつて、さっきの白兔がまだ先を急いでいるのが見えました。ぐずぐずしてる暇はありません。アリスは風のように走り出しました。そして、ちょうど、兔が角を曲がりながら。

「どうしよう！困ったよう！どんどん遅くなつてくう！」

と言つてるのが聞こえました。その声は可愛らしく優しい声でしたが、焦つてる声でした。

「あの・・・」

頭を抱えてる白兔に話し掛けると、白兔は肩をビクッとさせ、こちらを見て言った。

「だ、だれ？ 急がないとお・・・」

「い、ごめんなさい。ここは、どこですか？僕迷つてしまつて・・・あ、僕はアリスです」

なるべく優しく話し掛けると、白兎は少しだけホッとしたような顔をしました。

「わ、私はシロウサギです。ここは不思議の国です」

「不思議の国？」

シロウサギの言葉に謎が浮かんた様子のアリスです。

「貴方は、不思議の国の人じゃないのですか？」

「うん。君に着いてったら落ちてたの」

「あう！？私のせいですか！？・・・お城に行かれては？」

「可愛い子・・・でもお城って？」

と思ったアリスでしたが、またしても気になる単語が出てきて不思議に思ったアリスです。

「あ、歩いてれば見つかりますからー!!」

「あ、待って!!・・・行っちゃった・・・」

言うだけ言うとシロウサギは、どこかへ走って行きました。アリスは、その姿を呆然と見るしか出来ませんでした。

「どうでしょうか・・・」

周りを見回すと、天井の低い広間で、天井から下がった一列のランプで照らされていました。

広間のぐるりにはドアがありました。みんな鍵がかかっていました。アリスはそのドアを、あっちこつちと、みんな試してみました。やがて悲しげに真ん中へ引き返して来た時には、一体どうしたら外へ出られるのかな、と考えていました。

とつぜんアリスは、硬いガラスばかりでできた、小さな三本脚のテーブルにぶつかりました。上にはちつぽけな黄金の鍵が一つきりで、それ以外には何も載っていません。アリスは初め、これは、広間のドアのどれかの鍵かもしれない、と思いました。けれども、錠が大きすぎるのか、それとも鍵が小さすぎるのか、それはどっちにしても、どのドアも開きませんでした。けれども、二回目に周って歩いていた時アリスは、先ほどは無かったドアが現れていました。アリスがその綺麗な黄金の鍵を錠に入れて試してみると、なんと、嬉しいことに、ピタリと合ったではありませんか！

開けてみると、通路の先には真つ暗な闇が続いてました。

あまりの暗さに顔が引きつってるアリスです。

少し経ってから、遠くで微かにパタパタという足音が聞こえたので、アリスは慌てて顔を戻して、何が来たのか見てみました。シロウサギが帰ってくるところでした。立派な服装をして、片手にはキツドの皮手袋を持ち、もう一方の手には大きな扇を持っています。シロウサギは大急ぎでピョンピョン跳んで来ながら・・・。

「ああ！公爵夫人があゝ！公爵夫人があゝ！こんなにお待たせしたんじゃ、さぞかしお腹立ちのことなんだろうあゝ！」

と言いました。恐怖のあまり、アリスはもう必死で、誰にだって助けを求める心境になっていたので、近寄って来たシロウサギに向かい。

「あの、すみませんが」

と、低い、怖々した声で話しかけました。シロウサギは再びビクツとして、白のキッドの手袋と扇をその場にバツタリと落とし、猛烈な勢いで暗闇の中へ逃げ込みました。

アリスは扇と手袋とを拾いあげましたが、広間がとても暑かったので、喋り続けながら、扇で自分を扇ぎ続けました。

「やれやれ！今日はまた、どうしてこう何もかもおかしいんだろう！昨日まではちつとも変わったことは無かったんだよ。ということ、夜のうちに僕が変わったのかな？ちょっと待って・・・僕は今朝起きた時、昨日と同じだったかな？そういえば、少し変わってたような気もするけれど。でも、もし僕が昨日と同じ僕でないとする、問題だよ。僕は一体誰だろう？ああ、これは実に難しい大問題だ！」

考えたアリスでしたが、浮かばずに結局、ドアの奥に進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4745f/>

少年アリス

2010年10月28日00時53分発行